

岬之町だより

第6回「下関の三人の琵琶奏者」

日本銀行 下関支店長 岩下 直行

この連載の第二回に、岬之町で暗殺された幕末の勤皇の志士、真木菊四郎についてご紹介した。彼の命日である二月十四日には、紅石山にある彼の墓（地図①）の前で赤間神宮主催の「真木祭」が開催される。赤間神宮の水野直房宮司からご案内を頂き、今年の真木祭に参加してきた。当日は雨であったため、墓前ではなく赤間神宮の建物の中で、神事と琵琶・詩吟の奉納が行われた。詩吟では菊四郎の父、真木和泉の業績が詠じられ、筑前琵琶の演奏では菊四郎の生涯が歌い上げられたが、どちらも実に見事なものであった。琵琶の演奏を聴きながら、下関の歴史に登場する三人の琵琶奏者のことを思い出していた。以下では、赤間神宮を出発点として、この三人の縁の地を訪ねてみることにしよう。

最初の琵琶奏者は怪談話に登場する耳なし芳一である。芳一という琵琶法師は、物語の中に描かれた架空の人物なのだが、その物語は誰もが知っていて、実在の人物以上の存在感を持っている。

下関市阿弥陀寺町にある赤間神宮は、壇ノ浦の合戦で入水崩御された安徳天皇を祀る神社である。その地名が示すとおり、江戸時代までこの地に置かれていたのは、神社ではなく阿弥陀寺というお寺で、安徳天皇と平家一門を供養していた。それが、明治以降、天皇を祀るのにお寺なのはおかしいとして、神社に改められた。今でも、赤間神宮の境内の横に、平家の武将の墓と伝えられる「七盛塚」があり、観光名所となっている。そして、

その墓所の前に耳なし芳一の木像の納められたお堂が置かれている（地図②）。耳なし芳一はこの阿弥陀寺に住んでいた琵琶法師で、彼が平家の亡霊に導かれて琵琶を弾いたのは、この七盛塚の前ということになっている。

現在、我々がこの伝説のよりどころとしているのは、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）が英文で綴った「怪談（原題は「Kwaidan）」という短編集の第一話「耳なし芳一の話」だ。地元下関を舞台にした古い物語なのに、英語からの翻訳で読むというのも不思議な話である。この短編集の序文で八雲自身が書いているとおり、ここに収録された話は、八雲がゼロから構想した訳ではなく、日本の古い怪談本から取材したものだ。しかし、八雲はそうした書物を単に翻訳した訳ではない。八雲の妻、小泉節子が書いた「思い出の記」には、彼の執筆の様子が詳しく描かれている。

八雲は日本語の読み書きができず、これらの書物を読むのは妻である節子の役目だった。八雲は節子から怪談話を口述してもらったのだが、その際、節子が本を見ながら話すことを嫌った。節子は物語を読み終え、細部まで記憶した上で、それを自分の言葉で口述した。八雲はそれを聞いて、自分なりに物語をふくらませ、それを英語で文章にしていたのである。

節子は、淋しい夜に、ランプの芯を下げて薄暗くした部屋で怪談話をした。八雲は恐くてたまらない様子でそれを聞いた。彼らの家はまるで化け物屋敷のよう

な雰囲気だったという。そのうちに、節子自身が悪夢にうなされるようになり、暫く作業を中断したほどだった。

だから、この「耳なし芳一の話」は、骨格こそ古い怪談話だが、その文章は八雲による創作である。それを日本語に翻訳する際に、各時代の訳者が現代風の表現を工夫してきたため古びることがない。このため、今でも多くの人々に愛読されているのである。

この芳一のように、目の不自由な人が琵琶を奏するスタイルを、盲僧琵琶といった。演目は平家物語が多く、楽器の琵琶も無骨で力強いスタイルのものが使われたという。

これに対し、時代が下って明治時代になると、北部九州を中心に、筑前琵琶という、より優美な楽器が流行し始める。三味線音楽の要素を取り入れ、間奏や効果音だけでなく、歌の伴奏としても琵琶を弾くスタイルで、主に女性の習い事として普及した。宴席で芸者が演奏することもあり、三味線芸者ほどの数ではないが、明治の下関の花柳界にも琵琶芸者がいた。そのひとりが、今回取り上げる二人目の琵琶奏者、坂田キクである。

キクは、下関の検番に籍を置く琵琶奏者だったが、赤間神宮のすぐお隣の料亭、春帆楼（地図③）で開かれたお座敷で、ある英国人と出会う。西南部町にあった瓜生商會の総支配人、ネール・プロディ・リードである。二人は深い仲となり、一八九八年に二人の間に生まれたのが、日本を代表するオペラ歌手、藤原義江だ。紅石山の菊四郎の墓のすぐそば

